

【第6章:平安時代と武士の成長】

< 武士団の形成 >

① 武士の成長

武士とは→もともと、都の武官や地方の豪族などの有力者。警備や犯罪の取りしまりなどを行う。

→10世紀ごろから地方で武士が勢力を拡大

→武士がまとまり**武士団**をつくる
※有力な武士団:**源氏と平氏**

争乱とできごとのまとめ

争乱	
935年 平将門の乱	朝廷が武士の力で反乱を治める
939年 藤原純友の乱	= 朝廷が武士の力を認めるようになる。
1051年 前九年の役	東日本: 争いをしずめた源氏が勢力を伸ばす。
1083年 後三年の役	東北地方: 平泉(岩手県) を中心に奥州藤原氏が勢力を伸ばす
12世紀 瀬戸内海 の海賊などの反乱	西日本: 海賊をしずめた平氏が勢力を伸ばす。

【院政と平氏政権】

<院政>

①院政とは……天皇が位をゆずり、上皇となった後も、中心となって政治を行うこと。
※出家した上皇を法皇という。

11世紀後半に藤原氏と外戚関係のない後三条天皇が即位
→摂関家ではなく皇室中心の政治が復活。

1086年：白河上皇が院政を始める。

②武士の中央進出

上皇・摂関家・大寺社に対して荘園の寄進が増える。

→土地をめぐる対立が増える。

→有力な寺社は僧を武装させ、僧兵とする。

→上皇や摂関家は僧兵に対抗するため、平氏や源氏などの地方武士に都の警備を行わせる。

③二つの内乱

1156年:保元の乱

	勝利	敗北
皇室	後白河天皇(弟)	崇徳上皇(兄)
摂関家	藤原忠通(兄)	藤原頼長(弟)
平氏	平清盛	平忠正
源氏	源義朝	源為義・為朝

1159年:平治の乱

	勝利	敗北
貴族	信西(藤原道憲)	藤原信頼
武士	平清盛	源義朝

④二つの内乱の結果

朝廷内の対立が武士の戦いで解決されたため、勝ち残った**平清盛**が**後白河上皇の院政の下で大きな力を持つようになる。**

【平氏政権】

①平清盛の政治

1167年: 武士出身として初めて太政大臣になる。

→摂関家と同じように、娘を天皇のきさきにして権力を強める。

②経済政策

・日宋貿易: 大輪田泊 (現在の神戸港)などを整備。
大量の宋銭などを輸入し大きな利益を上げる。

・航海の安全を祈るために厳島神社を整備。

③平氏の滅亡

平氏が一族で高位高官を独占→皇族・貴族・大寺社などから反発が高まる。

1180年: 後白河上皇の子である以仁王が挙兵→敗北

↓

伊豆の源頼朝や木曾の源義仲らが挙兵

↓

1185年 頼朝の弟である源義経が壇ノ浦の戦い (山口県)で平氏をほろぼす。